OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ケレウェ語の適用形と使役形
Author(s)	小森, 淳子
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2004, 14, p. 69-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71109
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ケレウェ語の適用形と使役形 *

The Applicative and Causative Constructions in Kerewe

小森 淳子

Komori, Junko

1. はじめに

ケレウェ語はタンザニアの北西部、ビクトリア湖南部のウケレウェ島で話されているバントゥ系の言語である[1)]。バントゥ系言語の動詞は語根の前後にさまざまな接辞を付加させて文法関係やテンス・アスペクト、否定、法などを表したり、派生形を形成したりする[2)]。動詞の派生形は動詞語根に派生接尾辞を付加して作られる。ケレウェ語の動詞の派生形には、適用形、使役形、受動形、状態形、反意形、相互形の６つが認められる。

本稿の目的は、ケレウェ語の適用形と使役形を取り上げ、形態的、意味的、統語的な観点から概観し、記述することである。適用形と使役形は統語的な観点から見ると、どちらも動詞のとる項を一つ増やす。まず、適用形について新たにとる項の統語的な特徴とその項の意味役割について検討する。意味役割については他のバントゥ諸語の例と合わせてみていく。その後「道具」のようにみえる項について詳しくみる。

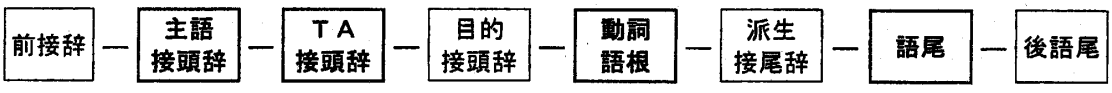
使役形が新たにとる項は「使役主」の他に「道具」の場合があり得るが、「道具」の項は「使役主」のように主語としてではなく目的語としてあらわれる。使役形ではこの点を中心にその統語的特徴と意味的特徴について検討する。

---

* 本研究は平成 13 年度科学研究費補助金（課題番号 11691013、課題名「北部中央バントゥ諸語の記述・比較研究」、研究代表：加賀谷良平東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）、ならびに平成 13, 14 年度同補助金（課題番号 12371001、課題名「現代アフリカ女性の開発プログラム参加と言語選択に関する学際的研究」、研究代表：宮本律子秋田大学助教授）の援助によって可能になったタンザニア・ウケレウェ島での調査に基づいている。調査協力者はウケレウェ出身のケレウェ人男性M氏(1922 年生)である。

[1] ケレウェ語はバントゥ諸語の分類番号 J24(/JE20)で、話者は約 10 万人である。系統的にはタンザニアのジンザ語、ハヤ語、ウガンダのンコレ・チガ語、ニョロ・トーロ語などに近く、これらの言語は「ルタラ諸語」と呼ばれている。

[2] ケレウェ語の動詞の構造は下の図の通りである。直説法の肯定文においては太字の部分（主語接頭辞、ＴＡ接頭辞、動詞語根、語尾）が必須の要素であり、他の接辞は任意である。



2．適用形[3)]

2.1　適用形の形態

動詞の適用形を作る派生接尾辞を「適用形接尾辞」と呼ぶ。また適用形接尾辞がついた動詞を「適用形」と呼ぶことにする[4)]。適用形接尾辞の形態は-il/-el である。適用形接尾辞の母音は動詞語根の母音に調和し、語根の最後の母音が a, i, u のときは -il、e, o のときは -el になる。(1)はそれぞれ左が原形動詞、右が適用形の例である[5)]。

(1)	-gamb-a	「言う」	-gamb-il-a
	-βík-a	「死を知らせる」	-βík-il-a
	-ful-a	「洗濯する」	-ful-il-a
	-leet-a	「持ってくる」	-leet-el-a
	-goy-a	「ウガリを作る」	-goy-el-a

語根が子音＋半母音の場合、(2)に示すように半母音 w のときは-el、半母音 y のときは-il がつくと考えられるが、-sy「粉に挽く」には-el がつく。子音語根の例は(3)の二例しか収集できなかったが、どちらも-eel がつくと考えられる[6)]。

(2)	-fw-a	「死ぬ」	-fw-el-a
	-nw-a	「飲む」	-nw-el-a
	-ly-a	「食べる」	-ly-il-a
	-sy-a	「粉に挽く」	-sy-el-a
(3)	-t-a	「置く」	-t-eel-a
	-h-a	「与える」	-h-eel-a

---

[3] 本稿で用いるケレウェ語の音韻表記は次の通りである。短母音は i, e, a, o, u、長母音は ii, ee, aa, oo, uu。高アクセントには[´]、下降アクセントには[ˆ]の符号を振り、低アクセントには符号なし。子音は b [b], β [β], ch [tʃ], d [d], f [f], g [g], h [h], j [dʒ], k [k], l [l], m [m], n [n], ny [ɲ], p [p], s [s], sh [ʃ], t [t], w [w], y [j], z [z]。

[4] 適用形接尾辞がつかないもとの動詞を適用形と対比させて言及するときには「原形動詞」と呼ぶことにする。

[5] 原形動詞やその派生形を示すときは動詞語根の前にハイフンをつけ、後ろに基本語尾-a を加えた形で示す。

[6] 子音一つの語根の場合にかぎり接尾辞の母音が長母音になると解釈する。この長母音を二つの短母音に分解して、たとえば-te-el-a、-he-el-a と分析することも可能であるが、ケレウェ語の動詞語根全体をみると母音で終わっているものはなく、すべて子音か半母音で終わっている。その原則を重視して、語根に母音を含めるのではなく、適用形接尾辞の母音が長くなると考える。

後に見るように、適用形はもとの動詞と意味的な派生関係をもつのが普通であるが、中には例(4)のように適用形接尾辞がついた形で語彙化している動詞がある。また例(5)のように適用形の形だけがあって、原形動詞が存在しない例もある。

(4)	-taah-a	「家へ帰る」	-taah-il-a	「入る」
	-simb-a	「穴を掘る」	-simb-il-a	「柱を立てる」
	-kóm-a	「殴る」	-kóm-el-a	「殴り殺す」
(5)	*-húl-a		-húl-il-a	「聞く、感じる」
	*-tuβ-a		-tuβ-il-a	「沈む」

二つの適用形接尾辞が連続して付くこともあるが、これらの動詞は特殊な意味が加わっていて語彙化している。(6)のような例である。

(6)	-lwál-a	「病気である」	-lwál-il-il-a	「いつも病気である」
	-gend-a	「行く」	-gend-el-el-a	「続ける」
	-liβat-a	「歩く」	-liβat-il-il-a	「踏む」
	-hw-a	「なくなる」	-hw-el-el-a	「完全になくなる」

これらの語彙化した適用形の動詞は、語根と接尾辞が一つになっている語幹として扱われるべきものである。

また、使役形接尾辞-y がついて語彙化している動詞の場合、下の(7)のように適用形接尾辞は-iz/-ez という形になって-y の前に挿入される。適用形接尾辞の子音 l が z に音韻交替するのであるが、次章の使役形のところで見るように、これは使役形接尾辞-y が後続することによって引き起こされる音韻交替である。

(7)	-koβ-y-a	「拾う」	-koβ-ez-y-a
	-nááβ-y-a	「(食器などを)洗う」	-naaβ-iz-y-a

語根末の子音が l である動詞は、使役形接尾辞-y がつくことによって l が z に交替するが、適用形接尾辞が挿入されると l に戻る。(8)の右側が適用形接尾辞のついた例である。

(8)

-βúz-y-a	「黙る」	-βul-iz-y-a
-guz-y-a	「売る」	-gul-iz-y-a
-βúúz-y-a	「尋ねる」	-βuul-iz-y-a
-semez-y-a	「よくする」	-semel-ez-y-a
-loz-y-a	「試す」	-lol-ez-y-a

(7)、(8)の例は「動詞語根に適用形接尾辞と使役形接尾辞-y の二つが付加される場合、必ずこの順序で接続される」と言い換えられるかもしれないが、(7)の-koβ-y-a「拾う」や(8)の-βúz-y-a「黙る」などは使役形接尾辞-y がついて語彙化しており、語形成の順からみれば-y のついた動詞に適用形接尾辞が付加される順番であって、二つの接尾辞が同時に付加されるのではない[7]。また、もう一つの使役形接尾辞である-isy と適用形接尾辞が共起する場合、適用形接尾辞が使役形接尾辞の間に挿入されて-is-iz-y[8]という形になることから、適用形接尾辞は-y の前に挿入されると考える方が適切である。

2.2 適用形の統語的特徴

バントゥ諸語一般に、上の(4)-(6)のような語彙化している適用形を除いて、生産的に派生された適用形はもとの動詞に「～のために」、「～の方に向かって」、「～を使って」などの意味を加えるといわれる(Ashton 1947, Port 1981, Kaji 1997, 中島 2000 他)。厳密にいえば、これらの意味は動詞単独で決まるのではなく、動詞が適用形になることによって加わる名詞句との意味的な関係によって決まる。つまり、適用形は動詞がとる項を一つ増やすが、その項の意味役割によって適用形の意味が決まるのである。

下に例をみてみよう。 (9)a は原形動詞-sya「挽く」を用いた文であり、(9)b がその動詞を適用形にした文である。

---

[7] -koβ-y-a「拾う」や-βúz-y-a「黙る」の語根はそれぞれ-koβ「関係する」や-βúl「なくなる」であると考えられるが、生産的な派生関係は認められず、使役形で語彙化しているといえよう。このような意味の特殊化の程度は動詞によって異なる。(7)の-nááβ-y-a「(食器などを)洗う」は語根が-nááβ「水浴する」、(8)の-guz-y-a「売る」は語根が-gul「買う」で、何らかの意味的な関係は認められるが、特殊な意味が加わっている点では語彙化しているといえる。(8)の-semez-y-a「よくする」は語根が-semel で「よい」(自動詞)という意味を表し、意味の派生関係が明白である。

[8] 語例：-ly-isy-a「食べさせる、放牧する」>(適用形) -ly-is-iz-y-a,
-hy-isy-a「熟れさせる、料理する」>(適用形) -hy-is-iz-y-a

(9)a. omuhalakazi a-ku-sy-a oβulo 「女の子がモロコシを挽いている」
女の子 3s-Pro-挽く-E モロコシ

b. omuhalakazi a-ku-sy-él-a niná oβulo
女の子 3s-Pro-挽く-apl-E 彼女の母 モロコシ
「女の子がお母さんのためにモロコシを挽いている」

c. * omuhalakazi a-ku-sy-él-a oβulo
女の子 3s-Pro-挽く-apl-E モロコシ

(9)b では動詞が適用形になることによって、新たな項である niná(彼女の母)が加わっている。この項は前置詞などを伴わない無標の名詞句であり、(9)c からもわかるように、動詞に対して必須の項である。また、(9)b にあらわれるそれぞれの項の意味役割を見ると、omuhalakazi(女の子)が動作を行う主体である「動作主」(agent)、oβulo(モロコシ)がその動作を受ける「対象」(theme)、そして niná(彼女の母)はその動作によって利益や恩恵を受ける「受益者」(beneficiary)の意味役割を担っていると考えられる。適用形になることによって「受益者」の項が増えるので、この適用形は「〜のために」という意味に解釈される。

バントゥ諸語では「目的語」を認定する基準として、 1) 動詞の直後に来る語順、2) 動詞述語内に目的接頭辞をとる、3) 受動文で「主語」になる、という 3 つの統語的特徴があげられる(Kisseberth & Abasheikh 1977: 183, Hyman & Duranti 1982: 220)。適用形がとる「対象」と「受益者」の項について、この基準をもとにその統語的な資格について検討してみよう。

まず語順の点では、(10)のように「対象」と「受益者」の項はどちらも動詞の直後の位置にくることができる。

(10)a. omuhalakazi a-ku-sy-él-a niná oβulo (= 9.b)
女の子 3s-Pro-挽く-apl-E 彼女の母 モロコシ

b. omuhalakazi a-ku-sy-él-a oβulo niná
女の子 3s-Pro-挽く-apl-E モロコシ 彼女の母

この点に関しては、「対象」と「受益者」の項は両方とも同じ資格をもっているということができる。

二つ目の基準の目的接頭辞であるが、これは主に動詞の動作を受ける名詞句と呼応する接頭辞で、その名詞句が主題である場合や、既出のものを指す場合に用いられる。また呼

応する名詞句を伴わない目的接頭辞は代名詞として機能する。たとえば(9)a の oβulo(モロコシ)が主題であるような場合、下の(11)a のように目的接頭辞をとることが可能である。また(11)b のように目的接頭辞のみで表すこともできる(下線部は目的接頭辞)[9]。

(11)a. omuhalakazi　a-ku-βu-sy-a　oβulo　「女の子がそのモロコシを挽いている」
女の子　3s-Pro-(14)-挽く-E　モロコシ(14)

b. omuhalakazi　a-ku-βu-sy-a　「女の子がそれを挽いている」
女の子　3s-Pro-(14)-挽く-E

スワヒリ語などでは目的接頭辞を一つしかとれないが、ケレウェ語では(12)のように、二つの目的接頭辞をとることができる。

(12) ekalamu　énu　ya-a-gi-m-p-a　「このペンは彼が私にくれた」
ペン(9)　この(9)　3s-Pst-(9)-1s-与える-E

二つの目的接頭辞のうち、前にくる目的接頭辞 gi-は ekalamu énu(このペン)に呼応し、後ろの m-は一人称単数の代名詞として機能している。二つの目的接頭辞はいわゆる「直接目的語」と「間接目的語」を指しており、この順番で接続されるのが普通である。

適用形の「対象」と「受益者」もそれぞれに呼応する目的接頭辞をとることができる。

(13) omuhalakazi　a-ku-βu-mu-sy-él-a　niná　oβulo
女の子　3s-Pro-(14)-3s-挽く-apl-E　彼女の母　モロコシ(14)

(13)のように、二つの目的接頭辞は「対象」－「受益者」の順で接続されるのが普通であるが、逆の順番(mu-βu-)も許容される。また(14)のように、それぞれの目的接頭辞を代名詞としてひとつずつとることも可能である。

(14)a. omuhalakazi　a-ku-mu-sy-él-a　oβulo
女の子　3s-Pro-3s-挽く-apl-E　モロコシ
「女の子が彼女のためにモロコシを挽いている」

---

[9] 例文中のグロスの( )内の数字は名詞クラスの番号を示しており、名詞句と動詞の接頭辞が同じ番号であれば呼応していることを表す。1, 2 クラスの名詞は原則的には(1), (2)のような番号を振らず、動詞の接頭辞には 3s(三人称単数)のように人称と数を用いて示すが、主語接頭辞と目的接頭辞が同じ人称・数で紛らわしい場合に限り、(1), (2)の番号で示す。

b. omuhalakazi　a-ku-βu-sy-él-a　niná
女の子　3s-Pro-(14)-挽く-apl-E　彼女の母
「女の子がお母さんのためにそれを挽いている」

つまり目的接頭辞をとるという点でも「対象」と「受益者」の両方が同等の資格をもっているといえる。

三つ目の受動文の基準はどうだろうか。この基準は、一般に能動文の目的語が受動文の主語に対応することからきている[10]。たとえば(9)a に対応する受動文は下の(15)のようにoβulo(モロコシ)が主語になる[11]。

(15)　oβulo　βu-ku-sy-eβw-a　omuhalakazi　「モロコシが女の子に挽かれている」
モロコシ(14)　(14)-Pro-挽く-pas- E　女の子

適用形の受動文では、(16)に示すように、「受益者」のみが主語になることができ、「対象」は不可である。

(16)a.　niná　a-ku-sy-él-w-a　omuhalakazi　oβulo
彼女の母　3s-Pro-挽く-apl-pas-E　女の子　モロコシ
「彼女のお母さんは女の子にモロコシを挽いてもらっている」

b.　*oβulo　βu-ku-sy-él-w-a　omuhalakazi　niná
モロコシ(14)　(14)- Pro-挽く-apl-pas-E　女の子　彼女の母

つまり受動文の主語になれるかという点に関しては、「対象」ではなく「受益者」の方が目的語としての資格をもっているということができる。

以上をまとめると、適用形の「対象」と「受益者」の項は、語順と目的接頭辞の点では同等の資格をもつが、受動文の主語になるという点では「受益者」のみが目的語としての資格をもつということである。(15)のように原形動詞の「対象」は受動文の主語になることから、適用形ではその資格が「受益者」に移るとみることができよう。つまり適用形が新たにとる「受益者」の項は目的語としての資格をもって加えられるということである。

---

[10] 本稿では「主語」は主語接頭辞に呼応する名詞句か、代名詞的に用いられている主語接頭辞自体を指すことにする。

[11] ケレウェ語の受動形接尾辞の形態は-w であり、動詞語根末が半母音の時は-iβw/-eβw である。また、受動形接尾辞は適用形/使役形接尾辞の後ろに接続される。受動文での「動作主」は前置詞 na を伴うこともあるが、普通は前置詞なしで動詞の直後に置かれる。

2.3 適用形の意味 —適用形がとる項の意味役割—

適用形の意味は新たにとられる項の意味役割によって決まるといえるが、ケレウェ語に限らずバントゥ諸語一般に、適用形がとる項の意味役割には共通したものがみられる。その意味役割には「受益者」、「被害者」(maleficiary)、「受容者」(recipient)、「着点」(goal)、「起点」(source)、「経験者」(experiencer)、「動機、理由」(motive, reason)、「場所」(location)、「道具」(instrument)などをあげることができる[12]。「受益者・被害者・受容者・経験者」は人を表す名詞句に限られる。これらの中には主要な意味役割である「動作主」と「対象」が含まれていないが、言い換えれば、適用形が新たにとる項というのは「動作主」と「対象」以外の種々の意味役割だということができる。以下に、「受益者」以外の意味役割の例を、他のバントゥ諸語の例と合わせてみておこう[13]。

(Ⅰ) 被害者 (maleficiary)

「被害者」は動詞句の行為が行われることによって何らかの被害をこうむる人を指すが、「被害者」と「受益者」は厳密に区別できるものではない。どちらも動詞句の行為の影響を間接的に受ける人を表すが、その影響が「被害」であるなら「被害者」と解釈され、利益であるなら「受益者」と解釈される。「盗む」という動詞の適用形では、下の(17)a のスワヒリ語のように、「被害者」と「受益者」の両方に解釈可能である(Port 1981:79)。ケレウェ語では普通、「受益者」に解釈される。

(17)a. a-li-<u>wa</u>-ib-*i*-a <u>watoto</u> chakula「彼は<u>子供達から／子供達のために</u>食べ物を盗んだ」(スワヒリ語)

b. a-ka-<u>βa</u>-iβ-*il*-a eβilyo <u>aβaana</u>「彼は<u>子供達のために</u>食べ物を盗んだ」(ケレウェ語)
3s-FP-3pl-盗む-apl-E 食べ物 子供

---

[12] Bresnan and Moshi(1990:149)、Ngonyani (1996:18-19)、Kaji(1997)、米田(2000: 143ff.)など参照。なおここで用いる「意味役割」は、動詞と項の意味的な関係を表す一般的な用語であって、それを統語構造に結び付けて論じる種々の文法理論(たとえば語彙機能文法など)と結びつくものではない。

[13] ケレウェ語以外の言語の出典は次の通り。スワヒリ語；Ashton(1947)、Port(1981)、中島(2000)、マテンゴ語；米田(2000)、ンデンデウレ語；Ngonyani(1996)、チェワ語；Alsina and Mchombo(1993)、Baker(1988)、ショナ語；Harford(1993)、ヘレロ語；米田(1997)、テンボ語；Kaji(1997)、ハヤ語；Byarushengo et al.(1977)。

なお、ケレウェ語以外の言語のグロスの表記は省略する(音韻表記の仕方も合わせてそれぞれの出典を参照のこと)。また、どの言語においても適用形接尾辞はイタリック体で示す。例文中の下線部分は当該の意味役割を担う項を示す。

一般に「被害者」に解釈される適用形の例には、他に次のようなものがある。

(18)a. a-ta-tu-harib-*i*-a furaha yetu「彼は私たちの楽しみを台無しにするだろう」(スワヒリ語)

b. Éngúndá i-a-nyí-lum-ír-á?-a émwaná 「犬が私の子供をかんだ」(テンボ語)

c. embwa e-ka-n-dum-*il*-a omwana wange 「犬が私の子供をかんだ」(ケレウェ語)[14]
犬(9) (9)-FP-1s-かむ-apl-E 子供 私の

d. ondjou ye-mu-tey-*er*-e ondjuo 「象が彼の家を壊した」(ヘレロ語)

e. dʒu-a-gu-típ-*il*-iti iŋgɔlɔ 「彼は君の畑の畝を踏みつぶした」(マテンゴ語)

f. ma-yani ɣa-ki-βa-yɔmɔl-*ɛl*-a ma-chi βa-lumba
「ヒヒたちが猟師たちの水を飲み干した」(ンデンデウレ語)

「被害者」が「対象」と共起している場合は、「被害者」はその「対象」の所有者であると解釈されるのが普通である。たとえば(18)a では「私たち」(目的接頭辞 tu-)が「被害者」で「私たちの楽しみ」(furaha yetu)が「対象」である。「対象」が動詞の行為を受けて「被害者」が被害をこうむるのであれば、そこに何らかの関係が認められるのは当然であろう[15]。先ほどみた(17)a の例において、「子供たち」が「被害者」に解釈されるのであれば「食べ物」は所有物であり、「受益者」に解釈される場合は所有物でないことからも、「被害者」と「対象」の所有関係をみてとることができる。

また、バントゥ諸語では「死ぬ」の適用形が「被害者」の項をとる例を見出すことができるが、この場合も死ぬ人と「被害者」は親子関係など一種の「所有関係」にあるのが普通である。ケレウェ語には(19)a のような例があるが、(19)b のように受動態で表されるのが普通である。

(19)a. omwana a-ka-mu-fw-*él*-a 「彼の子供が死んだ」(ケレウェ語)
子供 3s-FP-3s-死ぬ-apl-E

b. a-ka-fw-*él*-w-a omwana 「彼は子供に死なれた」(ケレウェ語)
3s-FP-死ぬ-apl-pas-E 子供

---

[14] このケレウェ語の文は(18)b のテンボ語の例をもとに作文してもらったものである。このような適用形の文を作ることはできるが、普通は原形動詞を用いた文 embwa e-ka-luma omwana wange「犬が私の子供をかんだ」を用いる。ケレウェ語では適用形の項として「被害者」をとることは一般的でないように思われる。

[15] このような「所有関係」は Kaji(1997:157)、米田(1997)、米田(2000:143)でも指摘されている。またこれらの先行研究では、「対象」が「被害者」の身体部分であるような場合(たとえば「犬が私の腕をかんだ」など)では適用形は用いられないことが指摘されている。

他のバントゥ諸語の例も挙げておく。(20)c, d は「被害者」ではなく「受益者」に解釈される例である。(20)d の例は文脈によってその他の意味にも解釈可能なことが示されている（米田 1997:132-4）。

(20)a. Émwana (wanyí) a-a-nyi-fú-*ír*-áʔ-a 「私の子供が死んだ」（テンボ語）

b. a-me-f-*i*-w-a na babake 「彼はお父さんに死なれた」（スワヒリ語）

c. Yêsu a-ná-f-*ér*-a anthu ônse 「イエスはすべての人のために死んだ」（チェワ語）

d. we-ndji-kok-*er*-a「彼女は 私のために／私の腕の中で／私を残して 死んだ」（ヘレロ語）

(Ⅱ) 受容者 (recipient)

「受容者」という意味役割はしばしば「着点」と同じように扱われるが[16]、ここでは「受容者」は「動作主」から「対象」を受け取る人、あるいは「対象」を向けられる人と限定して考える。つまり「受容者」は他動詞の適用形にのみあらわれる。次のような例がある。

(21)a. ya-a-ku-leet-*el*-a ekaháwa 「彼はあなたにコーヒーを持ってきた」（ケレウェ語）
3s-Pst-2s-持ってくる-apl-E コーヒー

b. omukeekúlu a-ka-gan-*il*-a aβeezúkulu βé engáni 「おばあさんは孫たちに物語を語った」（ケレウェ語）
おばあさん 3s-FP-語る-apl-E 孫たち 彼女の 物語

c. Hamisi a-me-kw-amb-*i*-a nini 「ハミシは君に何と言ったのか」（スワヒリ語）

d. dʒu-a-gu-hándak-*il*-a balúa 「彼は君あてに手紙を書いた」（マテンゴ語）

e. Mavuto a-na-perek-*er*-a mfumu chitseko 「マブトがチーフに扉を渡した」（チェワ語）

f. Amái v-áká-túm-*ír*-á mu-kóma chi-po「お母さんがお兄さんに贈物を送った」（ショナ語）

(21)d は「君のために手紙を書いた」という解釈も可能であり（米田 2000:145）、その場合、「君」は「受容者」ではなく「受益者」の意味役割を担うといえる。

(Ⅲ) 着点 (goal)

「着点」は場所を表す名詞句のほか、「対象」や「動作主」が到達する先の物や人を表

[16] Bresnan and Moshi(1990)他。

す名詞句でもあり得る。

(22)a. βa-a-fúluk-*il*-a mwanza 「彼らはムワンザに引っ越した」(ケレウェ語)
3pl-Pst-引っ越す-apl-E ムワンザ

b. dʒu-súp-*il*-ití kutémbɔ 「彼はリテンボに引っ越した」(マテンコ゛語)

c. omwana a-ka-iluk-*il*-*il*-a niná 「子供が母のもとへ逃げ込んだ」(ケレウェ語)[17]
子供 3s-FP-走る-apl-apl-E 彼(女)の母

d. mtoto a-li-m-kimbi-*li*-a mama yake 「子供が母のもとへ逃げ込んだ」(スワヒリ語)

e. iti li-ka-gw-*el*-a enzu yetu 「木が私たちの家の上に倒れた」(ケレウェ語)
木(5) (5)-FP-倒れる-apl-E 家 私達の

f. iti li-ka-n-gw-*el*-a 「木が私の上に倒れた」(ケレウェ語)
木(5) (5)-FP-1s-倒れる-apl-E

g. omuti we-ndji-w-*irir*-e 「木が私の上に倒れた」(ヘレロ語)

(IV) 起点 (source)

「起点」は動詞句の行為が始まる地点を指す。

(23)a. izóóβa li-ku-sohol-*el*-á oβutúluka 「太陽は東から出る」(ケレウェ語)
太陽(6) (6)-Pro-現れる-apl-E 東

b. βa-ka-tandik-*il*-a ha-lupapula lwa kaβili 「彼らは2ページから始めた」(ケレウェ語)
3pl-FP-始める-apl-E (16)-紙 ～の 2番目

c. tu-ta-anz-*i*-a ukurasa wa ishirini 「私たちは20ページから始める」(スワヒリ語)

これらの項が「起点」と解釈されるのは「現れる」や「始める」などの動詞の意味によるものであり、例は多くない。(23)b の項は「場所クラス」(注 18 参照)の形態になっており、その点では(VII)にみる「場所」の項に含めて考えることができる。

(V) 経験者 (experiencer)

「経験者」の項は「対象」の状態を表す自動詞の適用形にみられる。「経験者」はその状態を実感する人である。

---

[17] 「～のもとへ逃げ込む」という意味の適用形は語根-iluk「走る」に二つの適用形接尾辞をつけて表す。

(24)a. edagáa　　zi-ku-n-semel-*el*-a　　「ダガーは私にはおいしいです」(ケレウェ語)
ダガー(10)　(10)-Pro-1s-よい-apl-E

b. likɔlú　li-gu-báb-*il*-ití　　「おかずは君に辛かった」(マテンゴ語)

(VI)　動機・理由 (motive, reason)

自動詞でも他動詞でも、その行為が行われる理由や動機となっている名詞句を適用形の項としてとることができる。

(25)a. omwana　ónu　a-ku-lil-*il*-a　　niná　「この子はお母さんを求めて泣いている」
子供　この　3s-Pro-泣く-apl-E　彼(女)の母　(ケレウェ語)

b. Chitsîru　chi-ku-lír-*ír*-a　măntha　「愚者は恐怖のために泣いている」(チェワ語)

c. mo-rir-*ir*-e　tjike　「あなたはなぜ(何のために)泣いているのか」(ヘレロ語)

d. a-me-ki-j-*i*-a　kitabu hiki　「彼はこの本のために来た」(スワヒリ語)

e. mundu dʒɔlá　dʒu-hík-*il*-ití　líhɛŋgu　「あの人は仕事のために来ている」(マテンゴ語)

f. βa-lumba βa-ki-hyem-*el*-a mbiya　「猟師たちはお金のために狩をした」(ンデンデウレ語)

g. Babá v-aká-úráy-*ír*-á　munhu　marí　「お父さんはお金のために人を殺した」(ショナ語)

h. kat' á-ka-gul-*il*' óbugény' énfi　「カトは宴会のために魚を買った」(ハヤ語)

(VII)　場所 (location)

動詞の行為や状態がみられる場所を表すが、この項は地名の固有名詞以外、「場所クラス」の名詞接頭辞がつく[18]。下の(26)a の Mwanza は地名なので場所クラスの接頭辞はつかないが、emikono(腕)には冒頭母音の e を除いた mikono に 18 クラスの接頭辞 mu-がついている。(26)b も同じく kilábu(クラブ)に 18 クラスの接頭辞 mu-、(26)c の eméézа(テーブル)には 16 クラスの接頭辞 ha-がついている。

(26)a. taata　a-ka-fw-*el*-a　Mwanza / mu-mikono　zyange
私の父　3s-FP-死ぬ-apl-E　ムワンザ　(18)- 腕　私の
「私の父はムワンザで／私の腕の中で死んだ」(ケレウェ語)

[18] ここでいう「場所クラス」とは、場所を表す 16-18 番の名詞クラスを指す。バントゥ諸語に共通にみられるもので、おおよそ 16 クラスは「ある特定の場所」、17 クラスは「ある場所を含めた近辺(～のあたり)」、18 クラスは「何かの中」を表す。ケレウェ語では 16, 17 クラスの名詞接頭辞は ha-、18 クラスは mu-である。「場所クラス」の名詞接頭辞は他のクラスの名詞接頭辞の前に付加される。名詞接頭辞に冒頭母音がついている場合、冒頭母音は除かれる。

b. βa-ku-nw-*el*-a ebía mu-kilábu 「彼らはクラブでビールを飲んでいる」
3pl-Pro-飲む-apl-E ビール (18)-クラブ (ケレウェ語)

c. a-ku-ly-*il*-a oβwali ha-ééza 「彼はテーブルでご飯を食べている」
3s-Pro-食べる-apl-E 米飯 (16)-テーブル (ケレウェ語)

下に挙げる他のバントゥ諸語の例でも「場所」の項は「場所クラス」の形態になっている。

(27)a. babake a-li-f-*i*-a mikononi mwake 「彼の父は彼の腕の中で死んだ」(スワヒリ語)

b. tu-a-hín-*il*-a kutémbɔ 「我々はリテンボで踊った」(マテンゴ語)

c. βa-lumba βa-ki-tul-*il*-a nyama pa-manyahi
「猟師たちが草地で動物の皮を剥いだ」(ンデンデウレ語)

d. Alēnje a-ku-lúk-ír-a pa-mchēnga mikêka
「猟師たちが砂浜でゴザを編んでいる」(チェワ語)

e. Babá v-áká-úráy-*ír*-á nyoká pa-dombó「お父さんが蛇を石の上で殺した」(ショナ語)

動詞の行為がおこなわれる「場所」の名詞句は、原形動詞と共起することも可能である。たとえば(26)b は(28)のように原形動詞を用いても同じ意味を表す。

(28) βa-ku-nw-a ebía mu-kilábu 「彼らはクラブでビールを飲んでいる」
3pl-Pro-飲む-E ビール (18)-クラブ

(26)b と(28)では「場所」を表す名詞句の統語的な資格に違いがある。この点については次節で検討する。

(Ⅷ) 道具 (instrument)

適用形がとる項の意味役割に関して、バントゥ諸語の類型論的な観点から興味深いのは、「道具」の意味役割をもつ項をとるかとらないかという点である。スワヒリ語などは「道具」の項をとるが、ケレウェ語はとらない。「道具」の項をとる例を、スワヒリ語と他のバントゥ諸語の例にみてみよう。

(29)a. kisu cha ku-kat-*i*-a nyama 「肉を切るためのナイフ」(スワヒリ語)[19]

b. n-hándak-*il*-a kalámu adʒé 「私はこのペンで書く」(マテンゴ語)

c. ma-ɣanga βa-ki-kayul-*il*-a ki-βeɣa 「石で彼らは土鍋を壊した」(ンデンデウレ語)

d. Anyăni a-ku-phwány-*ír*-a mwăla dēngu 「ヒヒが石でかごを壊している」(チェワ語)

適用形が「道具」の項をとらないのはケレウェ語が属するルタラ諸語や南部アフリカのバントゥ諸語に見られる特徴のようである[20]。ケレウェ語では「道具」を項としてとるのは使役形であるが、この点については次章で詳しくみる。

以上、適用形が新たにとる項の意味役割について概観した。ケレウェ語に特徴的と思われることは「道具」の項をとらないことであるが、適用形が「道具」のように解釈できる項をとる例がみられる。その項は形態的には場所クラスであり、適用形がとる「場所」の意味範囲が「道具」のようにみえるものまで含んでいると考えられる。この点について次にみてみよう。

2.4 「場所」の意味範囲と統語的特徴

適用形が意味的には「道具」を表すようにみえる項をとる例は次のようなものである(それぞれ下線部分は「道具」のように解釈できる項)。

(30)a. omuhalakazi a-ku-sy-el-a oβulo ha-lumengo
女の子 3s-Pro-挽く-apl-E モロコシ (16)-挽き石(土台部分)
「女の子が挽き石でモロコシを挽いている」

b. a-ku-ly-il-a-ga oβwali ha-saháni ejo 「彼はいつもその皿でご飯を食べる」
3s-Pro-食べる-apl-E-IS ご飯 (16)-皿 その

c. a-ku-nw-el-a ameénzi mu-mutáho 「彼はひしゃくで水を飲んでいる」
3s-Pro-飲む-apl-E 水 (18)-ひしゃく

---

[19] スワヒリ語の適用形が「道具」の項をとるのは、(29)a のように「道具」の名詞句を不定詞が修飾するような場合であり、普通の文にはあらわれにくい。たとえば次のような文は話者によってによって判定にゆれがある。 ? a-li-ki-kat-*i*-a kisu hiki nyama (彼はこのナイフで肉を切った) (Port 1981:76)

[20] 適用形が「道具」の項をとらない点について言及されている言語には、ハヤ語(Byarushengo et al. 1977)、ショナ語(Harford 1993)、ヘレロ語(米田 1997)などがある。

d. βa-ku-nw-el-a　　ebía　　mu-kikombe　　「彼らはコップでビールを飲んでいる」
3pl-Pro-飲む-apl-E　ビール　(18)-コップ

これらの項は形態的には「場所クラス」の名詞句である。(30)a, b は olumengo(挽き石)、esaháni ejo(その皿)に 16 クラスの接頭辞 ha-がついた形である。(30)c, d は omutáho(ひしゃく)と ekikombe(コップ)に 18 クラスの接頭辞 mu-がついた形になっている[21]。しかし、この形態であればどのような「道具」でもとれるというわけではない。これらと対になって使われる道具、たとえば挽き石でも手にもつ方の石(ensyo)やスプーン(ekijiko)などは、(30)のような形式を用いて表すことはできない。下に例をみてみよう。

(31)a. * omuhalakazi　a-ku-sy-el-a　　oβulo　　ha-nsyo
女の子　　3s-Pro-挽く-apl-E　モロコシ　(16)-挽き石(手に持つ石)
(女の子が挽き石でモロコシを挽いている)

b. * a-ku-ly-il-a-ga　　oβwali　　ha-kijiko　(彼はいつもスプーンでご飯を食べる)
3s-Pro-食べる-apl-E-IS　米飯　　(16)-スプーン

これらの道具は普通、原形動詞と前置詞を用いて表される[22]。

(32)a. omuhalakazi　a-ku-sy-a　　oβulo　　na　　ensyo
女の子　　3s-Pro-挽く-E　モロコシ　～で　挽き石(手にもつ方の石)
「女の子が挽き石でモロコシを挽いている」

b. a-ku-ly-a-ga　　oβwali　na　ekijiko　「彼はいつもスプーンでご飯を食べる」
3s-Pro-食べる-E-IS　米飯　　～で　スプーン

逆に(30)の「道具」のようにみえる名詞句は、(32)のように原形動詞と前置詞を用いて表すことはできない。原形動詞と共起することは可能であるが、その場合でも下のように「場所クラス」の形態でなければならない。

(33)a. omuhalakazi　a-ku-sy-a　　oβulo　　* na　olumengo　　/ ha-lumengo
女の子　　3s-Pro-挽く-E　モロコシ　～で　挽き石(土台部分)　(16)-挽き石(土台部分)
「女の子が挽き石でモロコシを挽いている」

---

[21] (30)c, d に「何かの中」を表す 18 クラスの接頭辞がついているのは、ひしゃくやコップに口を持っていって、その中へ口をつけて飲んでいるというように解釈されるためである。これらの名詞に 16 クラスの接頭辞 ha-をつけると、ひしゃくやコップの上にのって飲んでいるような解釈になるので不可である。
[22] あるいは次章でみるように、これらの道具は使役形の項として表される。

b. a-ku-ly-a-ga oβwali * na esaháni ejo / ha-saháni ejo
3s-Pro-食べる-E-IS ご飯 ～で 皿 その (16)-皿 その
「彼はいつもその皿でご飯を食べる」

c. a-ku-nw-a ameénzi * na omutaho / mu-mutáho
3s-Pro-飲む-E 水 ～で ひしゃく (18)-ひしゃく
「彼はひしゃくで水を飲んでいる」

d. βa-ku-nw-a ebía * na ekikombe / mu-kikombe
3pl-Pro-飲む-E ビール ～で コップ (18)-コップ
「彼らはコップでビールを飲んでいる」

これらの名詞句が「場所クラス」であることの意味的な面を考えると、動詞の行為をおこなう人がそこに存在するような「場所」ではないが、それぞれの動作が行われる局所的な「場所」を表しているとみることができる。特に挽き石の土台部分や皿などは下に置かれて固定的であり、普通の道具のようには動かされない。これらの名詞句を適用形の項としてとることができるのは、「場所クラス」の形態で表される名詞句だからであり、これらの名詞句も「場所」の意味役割に含めて考えることができよう。逆に言えば、適用形がとる「場所」の項の意味範囲が広く、一見「道具」のように見えるものも含まれるということができる。ひしゃくやコップは固定されているものではないが、「場所クラス」の形態で表される点から、ケレウェ語の中では、飲む時に使われるこれらの道具は、少なくとも手に持つ方の挽き石やスプーンとは異なるものとして解釈されているのではないかと考えられる。

次に、これら「場所クラス」の名詞句の統語的な特徴を検討してみよう。結論から言うと、適用形がとる「場所クラス」の名詞は、目的語としての資格をもつ一方、原形動詞と共起する「場所クラス」の名詞句にはそのような資格がないということである。典型的な「場所」を表す(26)b と「道具」のようにみえる(30)a を例に、「場所」と「対象」の項の統語テストをみてみよう。

まず語順の点では、どちらの語順も可能であるが、下の例の a に示すように「対象」が前にくる語順の方が一般的である。

(34)a. βa-ku-nw-*el*-a ebía mu-kilábu (= 26.b)
3pl-Pro-飲む-apl-E ビール (18)-クラブ

b. βa-ku-nw-*el*-a mu-kilábu ebía
3pl-Pro-飲む-apl-E (18)-クラブ ビール
「彼らはクラブでビールを飲んでいる」

(35)a. omuhalakazi a-ku-sy-el-a oβulo ha-lumengo (= 30.a)
女の子 3s-Pro-挽く-apl-E モロコシ (16)-挽き石(土台部分)

b. omuhalakazi a-ku-sy-el-a ha-lumengo oβulo
女の子 3s-Pro-挽く-apl-E (16)-挽き石(土台部分) モロコシ
「女の子が挽き石でモロコシを挽いている」

目的接頭辞については、「場所クラス」のものは形態の点でも、動詞語根に接続される位置の点でも、他のクラスのものとは異なる。他のクラスの目的接頭辞は基本的に主語接頭辞と同じ形態で、動詞語根の直前に接続されるが、「場所クラス」のものは関係詞に類する形態(それぞれ-ho(16 ｸﾗｽ), -yo(17 ｸﾗｽ), -mo(18 ｸﾗｽ))で、語尾の後ろの位置に接続される。そのため場所クラスの目的接頭辞に相当するものは、他のクラスのものと区別して「場所辞」と呼ぶ。適用形と共起する「場所クラス」の名詞句は、主題として前置されれば場所辞をとることができる。同様に「対象」に呼応する目的接頭辞もとることができる[23]。この場合も「対象」の名詞句が主題として前置されているほうがいい。下に例をみてみよう(それぞれ下線部は目的接頭辞/場所辞)。

(36)a. ebía βa-ku-gi-nw-el-a mu-kilábu 「ビールを彼らがクラブで飲んでいる」
ビール(9) 3pl-Pro-(9)-飲む-apl-E (18)-クラブ

b. mu-kilábu βa-ku-nw-el-a-mo ebía 「クラブでは彼らがビールを飲んでいる」
(18)-クラブ 3pl-Pro-飲む-apl-E-loc(18) ビール

(37)a. oβulo a-ku-βu-sy-el-a omuhalakazi ha-lumengo
モロコシ(14) 3s-Pro-(14)-挽く-apl-E 女の子 (16)-挽き石
「モロコシは女の子が挽き石で挽いている」

b. ha-lumengo a-ku-sy-el-a-ho omuhalakazi oβulo
(16)-挽き石 3s-Pro-挽く-apl-E-loc(16) 女の子 モロコシ(14)
「挽き石で女の子がモロコシを挽いている」

[23] ただし、目的接頭辞と場所辞の両方を同時にとることはできない。

受動文の主語になれるかどうかという基準では、「対象」の名詞句と同じく「場所クラス」の名詞句も主語になることができる。ただし、それぞれ下のbのように「場所クラス」の名詞句が主語になる受動文では場所辞をとる必要がある。

(38)a. ebía e-ku-nw-el-w-a mu-kilábu 「ビールがクラブで飲まれている」
ビール(9) (9)-Pro-飲む-apl-pas-E (18)-クラブ

b. mu-kilábu ha-ku-nw-el-w-a-mo ebía 「クラブではビールが飲まれている」
(18)-クラブ (18)-Pro-飲む-apl-pas-E-loc(18) ビール

(39)a. oβulo βu-ku-sy-él-w-a ha-lumengo 「モロコシが挽き石で挽かれている」
モロコシ(14) (14)- Pro-挽く-apl-pas-E (16)-挽き石

b. ha-lumengo ha-ku-sy-él-w-a-ho oβulo 「挽き石ではモロコシが挽かれている」
(16)-挽き石 (16)-Pro-挽く-apl-pas-E-loc(16) モロコシ

以上のように、適用形がとる「場所クラス」の名詞句は目的語としての資格をもつといえる。しかし、原形動詞と共起する「場所クラス」の名詞句ではこのような結果とならず、目的語の資格をもっているとはいえない。原形動詞と共起する例として、典型的な「場所」を表す(28)と、「道具」のようにみえる(33)dを例に統語テストをみてみよう(ここでは「場所」の名詞句に絞って見る)。

語順の点では、どちらの語順も可能であるが、「場所」が後ろにくる方が普通である。

(40)a. βa-ku-nw-a ebía mu-kilábu (=28)
3pl-Pro-飲む-E ビール (18)-クラブ

b. βa-ku-nw-a mu-kilábu ebía
3pl-Pro-飲む-E (18)-クラブ ビール
「彼らはクラブでビールを飲んでいる」

(41)a. βa-ku-nw-a ebía mu-kikombe (=33.d)
3pl-Pro-飲む-E ビール (18)-コップ

b. βa-ku-nw-a mu-kikombe ebía
3pl-Pro-飲む-E (18)-コップ ビール
「彼らはコップでビールを飲んでいる」

場所辞の点でみると、典型的な「場所」の名詞句は場所辞をとることができるが、「道具」を表すようにみえる名詞句は場所辞をとることができない[24]。

(42)a. mu-kilábu βa-ku-nw-a-mo ebia 「クラブでは彼らがビールを飲んでいる」
(18)-クラブ 3pl-Pro-飲む-E-loc(18) ビール

b. * mu-kikombe βa-ku-nw-a-mo ebía (コップでは彼らがビールを飲んでいる)
(18)-コップ 3pl-Pro-飲む-E-loc(18) ビール

受動文では、どちらの「場所クラス」の名詞句も主語になれない。

(43)a. * mu-kilábu ha-ku-nw-eβw-a-mo ebía
(18)-クラブ (18)-Pro-飲む-pas-E-loc(18) ビール

b. * mu-kikombe ha-ku-nw-eβw-a-mo ebía
(18)-コップ (18)-Pro-飲む-pas-E-loc(18) ビール

以上のように、原形動詞と共起する「場所クラス」の名詞句は統語的な資格の点で、適用形がとる「場所クラス」の名詞句と異なっているといえる。

2.5 適用形のまとめ

以上、適用形についてみた点をまとめると、次のようになる。

1) 適用形は統語的に項を一つ増やすが、新たに加わる項は「動作主」と「対象」以外のさまざな意味役割を表し、統語的には目的語としての資格をもつ。
2) 他のバントゥ諸語では適用形のとる項に「道具」が含まれることもあるが、ケレウェ語の適用形は「道具」の項はとらない。
3) 適用形がとる「道具」のようにみえる項は、「場所クラス」の形態であり、意味役割の点でも「場所」の範囲に含めることができる。
4) 適用形がとる「場所」の項は、統語的に目的語の資格をもつが、同じ意味を表す原形動詞文にあらわれる「場所」の名詞句には、そのような資格はない。

---

[24] (42)のように場所辞をとる場合ととれない場合があるが、この違いが「場所クラス」の名詞句の意味による違いなのかどうかはさらに詳細に検討する必要があり、今後の課題である。

３．使役形

3.1　使役形の形態と意味

動詞の使役形を作る派生接尾辞を「使役形接尾辞」と呼ぶ。使役形接尾辞の形態には-isy/-esy と-y の二種類が認められる。-isy/-esy の方が-y より生産的で使役の意味が明らかである。-y がつく使役形には使役の意味を表さず単に他動詞になっている場合もある。

接尾辞-isy/-esy は動詞の語根の母音に調和するが、語根が子音＋半母音の場合は、適用形の場合と同じく、半母音が w のときは-esy、y のときは-isy がつく（ただし-sy「粉に挽く」の場合のみ-esy がつく）。接尾辞-isy/-esy の語例を(44)の右側の列にあげる。

(44)	-taah-a	「帰る、出て行く」	-taah-isy-a	「出て行かせる、帰らせる」
	-andik-a	「書く」	-andik-isy-a	「書かせる」
	-goy-a	「ウガリを作る」	-goy-esy-a	「ウガリを作らせる」
	-iyeg-a	「学ぶ」	-iyeg-esy-a	「学ばせる、教える」
	-nw-a	「飲む」	-nw-esy-a	「飲ませる」
	-hy-a	「熟れる」	-hy-isy-a	「熟れさせる、料理する」
	-ly-a	「食べる」	-ly-isy-a	「食べさせる、放牧する」
	-sy-a	「粉に挽く」	-sy-esy-a	「粉に挽かせる」

この接尾辞がついた形は「～に～させる」という使役の意味になるのが基本であるが、ケレウェ語では使役形が「～を使って～する」という意味を表すこともある。たとえば-nw-esy-a は「～を使って飲む」、-ly-isy-a は「～を使って食べる」、-sy-esy-a は「～を使って粉を挽く」という意味を表すことができる。

接尾辞-y は動詞語根にそのまま接続するが、語根末の子音が t, l, d の場合は音韻交替がおこり、t は s に、l, d は z になる。また、語根末の子音が k の場合は形態音韻交替がおこり、k-y-a の音の連続は[tʃa]と発音される。(45)に接尾辞-y がつく例をあげる。

(45)	-yom-a	「乾く」	-yom-y-a	「乾かす」
	-nááβ-a	「水浴する」	-nááβ-y-a	「食器などを洗う」
	-tagat-a	「沸く」	-tagas-y-a	「沸かす」
	-at-a	「壊す、割る」	-as-y-a	「(薪などを)割る、割く」

-lwál-a	「病気になる」	-lwáz-y-a		「看病する」
-gul-a	「買う」	-guz-y-a		「売る」
-téél-a	「たたく」	-tééz-y-a		「～を使ってたたく」
-hend-a	「折る、壊す」	-henz-y-a		「折らせる」[25]
-téék-a	「料理する」	-téék-y-a	[té:tʃa]	「～を使って料理する」
-andik-a	「書く」	-andik-y-a	[anditʃa]	「～を使って書く」

接尾辞-y をとる動詞の多くは語彙的に決まっており、意味が特殊化している例が多くみられる。たとえば-nááβ-a「水浴する」と-nááβ-y-a「食器などを洗う」、-lwál-a「病気になる」と-lwáz-y-a「看病する」、-gul-a「買う」と-guz-y-a「売る」などの例である。次節で見るように他動詞が使役形になると動詞のとる項が一つ増えるが、-gul-a「買う」と-guz-y-a「売る」のように、意味が特殊化するだけで項の数は変わらない例もある。自動詞の使役形では、意味が特殊化している場合でも項が一つ増えて他動詞になっている。

-y のつく派生形も-isy/-esy と同様、「～を使って～する」という意味を表す場合がある。-andik-a「書く」には二つの使役形がみられるが、接尾辞-isy のついた-andik-isy-a は「～に書かせる」、接尾辞-y のついた-andik-y-a は「～を使って書く」という意味を表すという使い分けがある。

3.2 使役形の統語的特徴

-at-a「壊す、割る」と-as-y-a「(薪などを)割る、割く」、-gul-a「買う」と-guz-y-a「売る」のような特別な例を除いて、使役形になると動詞のとる項が一つ増える。まず、自動詞文とその使役文[26]の例をみてみよう。それぞれ a が自動詞文、b がその使役文の例である。

(46)a. oβutaaga βw-a-yóm-a 「キャッサバ粉が乾いた」
キャッサバ粉(14) (14)-Pst-乾く-E

b. mááwe ya-a-βu-yóm-y-a oβutaaga 「お母さんがキャッサバ粉を乾かした」
私の母 3s-Pst-(14)-乾く-cau-E キャッサバ粉(14)

---

[25] この例は Hurel(1909)による。-henda という語は現在のケレウェ語では用いられておらず、名前などに残っているだけである。

[26] ここでは使役形接尾辞によって派生された使役形動詞を用いた文を「使役文」と呼ぶことにする。

(47)a. ameénzi ga-a-tagat-a 「水が沸いた」
水(6) (6)-Pst-沸く-E

b. mááwe ya-a-ga-tagas-y-a ameénzi 「お母さんが水を沸かした」
私の母 3s-Pst-(6)-沸く-cau-E 水(6)

使役文では mááwe(私の母)が新たに加わり二項になっている。新たに加わった項の意味役割は「動作主」であり、統語的には主語である。もとの文で主語だった項は「対象」の意味役割をもち、使役文では目的語となっている(目的接頭辞と呼応することから分かる)。これらの使役文は二項をとる他動詞文になっていると言える。

次に、他動詞文とその使役文の例をみてみよう。それぞれ a が他動詞文、b がその使役文の例である。

(48)a. omuhalakazi a-ku-goy-a oβwita 「女の子がウガリをこねている」
女の子 3s-Pro-こねる-E ウガリ

b. niná a-ku-mu-goy-esy-a omuhalakazi oβwita
彼女の母 3s-Pro-(1)-こねる-cau-E 女の子(1) ウガリ
「お母さんが女の子にウガリをこねさせている」

(49)a. omwana a-ku-ly-a oβwáli 「子供がご飯を食べている」
子供 3s-Pro-食べる-E 米飯

b. aβakazi βa-ku-mu-ly-isy-a omwana oβwáli
女たち 3pl-Pro-(1)-食べる-cau-E 子供(1) 米飯
「女たちが子供にご飯を食べさせている」

それぞれの使役文では「使役主」(causer)の意味役割をもつ項が主語として新たに加わっている。もとの文で主語だった項(「動作主」の意味役割をもつ)は目的語になっている。一般に使役文は、「使役主」を主語としてとり、もとの主語が統語的に「降格」して主語でなくなる操作ととらえられているが、それはここでみた自動詞、他動詞のどちらの例にもあてはまるといえる。

ところで、ケレウェ語の使役形は「〜を使って〜する」という意味を表すことができるが、この意味を表す使役文では、新たに加わる項は「道具」と考えられる。下に例をみてみよう。それぞれ b が「道具」をとる使役文である(下線部は「道具」を表す項)。

(50)a. omuhalakazi a-ku-sy-a oβulo 「女の子がモロコシを粉に挽いている」(＝9.a)
女の子 3s-Pro-挽く-E モロコシ

b. omuhalakazi a-ku-sy-esy-a ensyo oβulo
女の子 3s-Pro-挽く-cau-E 挽き石(手に持つ石) モロコシ
「女の子は挽き石でモロコシを粉に挽いている」

(51)a. omwana a-ku-ly-a oβwáli 「子供がご飯を食べている」
子供 3pl-Pro-食べる-E 米飯

b. omwana a-ku-ly-isy-a ekijiko oβwáli 「子供がスプーンでご飯を食べている」
子供 3pl-Pro-食べる-cau-E スプーン 米

(52)a. a-ku-nw-a ameénzi 「彼は水を飲んでいる」
3s-Pro-飲む-E 水

b. a-ku-nw-ésy-a omutáho ameénzi 「彼はひしゃくで水を飲んでいる」
3s-Pro-飲む-cau-E ひしゃく 水

(53)a. βa-ku-kukúmb-a hánza 「彼らは外を掃いている」
3pl-Pro-掃く-E 外

b. βa-ku-kukumb-y-a elyeyo hánza 「彼らはほうきで外を掃いている」
3pl-Pro-掃く-cau-E ほうき 外

(54)a. omuhalakazi a-ku-téék-a eβítooke 「女の子がバナナを料理している」
女の子 3s-Pro-料理する-E バナナ

b. omuhalakazi a-ku-téék-y-a énkwi eβítooke
女の子 3s-Pro-料理する-cau-E 薪 バナナ
「女の子が薪でバナナを料理している」

「道具」の項は主語ではなく目的語として加わっている。これらの「道具」の項が目的語であることを「対象」の項と合わせてテストしてみよう。

まず語順の点では、「道具」が前にくる語順の方が一般的である。つまり上の例のように「道具」が動詞の直後の位置にくる語順である。「対象」が前にくる語順が可能な場合もあるが、明らかに不可である場合もある[27]。この点では「道具」の項のほうが「対象」

[27] 上の例のでは、(50)b や(51)b では「対象」が前にくる語順も許容されるが、(52)b-(54)b では逆の語順は不可

より目的語としての資格があるといえよう。

受動文の主語という基準では、「道具」も「対象」も主語になれる。この点ではどちらの項も目的語としての資格をもつといえるだろう。(50)b を例に受動文の例をみておこう。

(55)a. ensyo e-ku-sy-es-iβw-a oβulo (na) omuhalakazi
挽き石(9) (9)-Pro-挽く-cau-pas-E モロコシ ～によって 女の子
「挽き石が女の子によってモロコシを挽くのに使われている」

b. oβulo βu-ku-sy-es-iβw-a ensyo (na) omuhalakazi
モロコシ(14) (14)-Pro-挽く-cau-pas-E 挽き石 ～によって 女の子
「モロコシは挽き石で女の子によって挽かれている」

目的接頭辞がとれるかどうかをみると、「道具」は目的接頭辞をとることができるが「対象」はとれない。(51)b を例に見てみよう(下線部は目的接頭辞)。

(56)a. omwana a-ku-ki-ly-isy-a ekijiko oβwáli
子供 3s-Pro-(7)-食べる-cau-E スプーン(7) 米飯
「子供がそのスプーンでご飯を食べている」

b. * omwana a-ku-βu-ly-isy-a ekijiko oβwáli
子供 3s-Pro-(14)-食べる-cau-E スプーン 米飯(14)

以上の点からみて、使役文にあらわれる「道具」と「対象」では、「道具」の方が目的語としての資格をもっているということができる。

さて、使役文で新たに加わる項の統語的な位置についてもう一度みてみると、(46)-(49)の使役文では「動作主」あるいは「使役主」の項が主語として加わっている一方、(50)-(54)の使役文では「道具」の項が目的語として加わっている。しかしこれでは、同じ使役文ながら統語的な統一性を欠くことになる。「道具」をとる使役文においても、新たに加えられるのは「動作主」の項であるとすれば統一的にとらえることができるが、そうするとたとえば(50)b の使役文(下に再掲)は、(57)のような文を仮定し、それに「動作主」の項が新たに加えられた結果と見ることになる。しかし(57)のような文は不可である。

である。例えば(54)b の語順を逆にして omuhalakazi a-ku-téék-y-a eβítooke énkwi とすると「バナナで薪を料理する」ように感じられるということである。

(57) * ensyo e-ku-sy-a oβulo （挽き石がモロコシを粉に挽いている）
挽き石(9) (9)-Pro-挽く-E モロコシ

(50)b. omuhalakazi a-ku-sy-esy-a ensyo oβulo （再掲）
女の子 3s-Pro-挽く-cau-E 挽き石(手に持つ石) モロコシ
「女の子は挽き石でモロコシを粉に挽いている」

(50)b の使役文は、(57)のような「道具」（挽き石）と「対象」（モロコシ）からなる文に、「動作主」（女の子）が新たに加えられたものとは考えられない。やはり「道具」の項は使役文の目的語として加えられていると考える方が妥当であろう。

一般に使役文は、新たな主語をとり、もとの主語を降格させるような統語操作を含むと考えられるが、ここでみるケレウェ語の使役文はそのような統語操作を含むものではないと考える方が妥当かもしれない。そのように考える根拠は二つある。一つは主語の降格というような統語操作を含む使役文は項の形態が異なるのではないかということである。次の(58)b は、代筆で子供に手紙を書いてもらうような状況を表しているが、もとの文で主語だった「子供」は降格して主語でなくなり、さらに「場所クラス」の形態になっている。

(58)a. omwana a-ku-andik-a ebalua 「子供が手紙を書いている」
子供 3s-Pro-書く-E 手紙

b. máwe a-ku-andik-isy-a ebalua ha-mwana
お母さん 3s-Pro-書く-cau-E 手紙 (16)-子供
「お母さんが子供に手紙を書かせている」

使役文の「子供」の項は「被使役者」(causee)の意味役割を担っているが、「場所クラス」の接頭辞がついている。下に再掲する(48)b, (49)b の使役文では「被使役者」の項（女の子/子供）はもとの名詞の形態のまま（無標）であり、この点が(58)b の使役文とは異なっている。

(48)b. niná a-ku-mu-goy-esy-a omuhalakazi oβwita （再掲）
彼女の母 3s-Pro-(1)-こねる-cau-E 女の子(1) ウガリ
「お母さんが女の子にウガリをこねさせている」

(49)b. aβakazi βa-ku-mu-ly-isy-a omwana oβwáli （再掲）
女たち 3pl-Pro-(1)-食べる-cau-E 子供(1) 米飯
「女たちが子供にご飯を食べさせている」

二つ目の根拠として、これらの使役文の意味的な特徴が挙げられる。(48)b, (49)b の使役文は、(58)b の使役文に比べて「被使役者」に対する関与が直接的である。つまり、これらの使役文では「使役主」が「被使役者」に直接はたらきかけて動詞の行為を行わさせており、「被使役者」に命令したり、許可を与えるなどして動詞の行為を自立的に行わせているのではない。たとえば(48)b では、お母さんが女の子に言いつけてウガリをこねさせているのではなく、直接女の子の手をとってお母さんが一緒にウガリをこねている。(49)b も同じく、女たちが用意したご飯を子供が自分で食べているのではなく、女たちが子供の口までご飯を持っていって食べさせている。それに対して(58)b では、子供が自立的に手紙を書いているのであって、お母さんが子供の手をとって手紙を書かせているのではない。

(48)b, (49)b の例で、「被使役者」に直接はたらきかけず、自立的に動詞の行為を行わせる場合は、(59)のように「言う」や「許す」などの動詞と接続形を用いた複文で表す[28]。

(59)a. niná ya-a-gamb-il-a omuhalakazi a-goy-e oβwita
彼女の母 3s-Pst-言う-apl-E 女の子 3s-こねる-SE ウガリ
「お母さんが女の子にウガリをこねるように言った」

b. aβakazi βa-a-lekel-a omwana a-ly-e oβwáli
女たち 3pl-Pst-許す-E 子供 3s-食べる-SE 米飯
「女たちが子供にご飯を食べさせた(食べるのを許した)」

つまり、(48)b, (49)b のような「被使役者」が無標であらわれる使役文は、名詞句の形態の点でも、「被使役者」に直接はたらきかける使役を表すという意味的な点でも、一般的な「使役」を表す文とは異なっていると考えることができる。また、「被使役者」に直接はたらきかけて動作を行わせるという意味の点から、「被使役者」として「人」だけでなく「道具」までとることが可能になったと考えることができる[29]。

以上の点から、(48)-(54)に見た使役文は、新たな主語をとって、もとの主語を降格させるような統語操作を含むものではないと考えられる。そうすると、新たな項として一方で

---

[28] これらの例において、(58)b のように「被使役者」を「場所クラス」の形態にして自立的な動作の使役を表すことができるかどうかということは残念ながら未調査である。今後の課題としたい。

[29] 湯川(2002)はトーロ語(ケレウェ語と同じルタラ諸語に属する)の使役形動詞にも「道具」をとる用法があることを指摘し、「使役動詞のこの方向(つまり、事物まで「被使役者」になる方向)への拡張は、このあたりの言語に特徴的であるが、ジンバブエ以南の言語にも見られる」(p.40)と述べている。使役形についてのバントゥ諸語の比較と分布などについては今後の課題である。

は「使役主」を主語として加え、一方では「道具」を目的語として加えるように見える不統一を生じさせることもない。つまり「被使役者」が無標であらわれる使役文は、三項をとる他動詞文であり、自動詞の使役文が二項をとる他動詞文と同じであることと並行的にとらえることができるのではないかということである。

3.3 使役形のまとめ

以上、使役形についてみた点をまとめると次のようになる。

1) 使役形接尾辞には-isy/-esy と-y の二種類があるが、-isy/-esy の方が生産性が高い。また、どちらの接尾辞も「道具」を用いる動作を表すことができる。

2) 使役形は統語的に項を一つ増やすが、新たに加わる項は「動作主/使役主」と「道具」の意味役割を表し、「動作主/使役主」は主語として、「道具」は目的語として加えられるように見える(「動作主」は自動詞の使役形にのみ現れる)。

3) 「被使役者」の項が無標であらわれる使役文では、「使役主」が「被使役者」に直接はたらきかけて動作を行わせており、「被使役者」は自立的に動作を行わない。自立的に行わせる使役は、複文の形式や「被使役者」を有標の形(「場所クラス」の形態)にして表す。

4) 項の形態や意味的な特徴から考えて、無標の「被使役者」をとる使役文は、項を一つ増やした三項他動詞を用いる文であり、いわゆる「使役」を表し、主語の降格のような統語操作をともなう一般的な使役文とは異なると考えられる。

4. おわりに

ケレウェ語の適用形と使役形について形態的、意味的、統語的な観点からみてきた。それぞれの派生形について考察してきたことは、各節のまとめにある通りである。どちらの派生形にしても、統語的に項を一つ増やし、新たに加えられる項の意味役割がそれぞれの派生形の意味を決めるといえる。ここでみた適用形と使役形の一つの特徴のまとめとして、次のような例を挙げておこう。

(60)a. a-ku-nw-a ameénzi mu-mutáho (=33.c)
3s-Pro-飲む-E 水 (18)-ひしゃく

b. a-ku-nw-el-a ameénzi mu-mutáho (=30.c)
3s-Pro-飲む-apl-E 水 (18)-ひしゃく

c. a-ku-nw-ésy-a omutáho ameénzi (=52.b)
3s-Pro-飲む-cau-E ひしゃく 水

(60)はどれも「彼(女)がひしゃくで水を飲んでいる」という意味を表すが、a は原形、b は適用形、c は使役形の動詞が用いられている。また「ひしゃく」を表す名詞の形態と統語的な資格が異なっている。原形と適用形では「場所クラス」の形態であり、使役形の場合のみ無標である。

原形動詞の「ひしゃく」は目的語としての資格をもたないが、適用形と使役形ではその資格をもっている。適用形では「ひしゃく」と共に「水」も目的語としての資格をもつ一方、使役形では語順や目的接頭辞の基準から、「水」は目的語としての資格をもたない。つまり、適用形と使役形では共起している「対象」の名詞句の統語的な資格に違いがあるということである。

さらに意味役割の点を考えると、使役形では「ひしゃく」の意味役割は「道具」ということができるが、適用形では普通に用いられる道具全般をこの形式で表すことができないことから、「道具」の意味役割ではなく、形態どおり「場所」の意味役割に含まれると考えられ、適用形がとる「場所」の意味範囲は局所的な場所まで含む広いものだと考えることができる。

使役形については包括的な記述ができたとは言えず、調査の不足から課題を残すこととなったが、少なくとも無標の「被使役者」や「道具」の項をとる使役文は、統語的にも意味的にも一般的な「使役」を表すものとは異なっており、主語の降格などを伴う統語操作を含むような使役文ではないと考えられる。またこのような特徴が、使役形の項として無標の「道具」の項をとることを可能にしていると考えられる。

略号一覧

apl: 派生接尾辞・適用形 (applicative suffix)
cau: 派生接尾辞・使役形 (causative suffix)
E: 基本語尾 (verb ending)
FP: ＴＡ接頭辞・遠過去 (far past prefix)
IS: 強調辞 (intensive suffix)
loc(16)-(18): 場所辞 (locative suffix)
pas: 派生接尾辞・受動形 (passive suffix)
pl: 主語/目的接頭辞・複数 (plural)
Pro: ＴＡ接頭辞・進行 (progressive prefix)
Pst: ＴＡ接頭辞・過去 (past prefix)
rec: 派生接尾辞・相互形 (reciprocal suffix)
s: 主語/目的接頭辞・単数 (nominative/objective prefix, singular)
SE: 接続形語尾 (subjunctive ending)
1, 2, 3: 主語/目的語接頭辞・人称 (nominative/objective prefix, person)
- : 形態素境界 (morphological boundary)

参考文献

Alsina, Alex. and Sam A. Mchombo. 1993. "Object Asymmetries and the Chichewa Applicative Construction," in S. Mchombo(ed.), 17-45.

Ashton, E. O. 1947. *Swahili Grammar,* Longman.

Baker, Mark. 1988. "Theta Theory and the Syntax of Applicatives in Chichewa," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 353-389, Kluwer Academic Publishers.

Bresnan, Joan and L. Moshi. 1990. "Object Asymmetries in Comparative Bantu Syntax," *Linguistic Inquiry* 21-2, 147-185, MIT Press.

Byarushengo, Ernest Rugwa et al. (eds.) 1977. *Haya Grammatical Structure*, University of Southern California.

Harford, Carolyn. 1993. "The Applicative in Chishona and Lexical Mapping Theory," in S. Mchombo(ed.), 93-111.

Hurel, Eugène. 1909. "La Langue Kikerewe," Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen 12, 1-113.

Hyman, L. M. and A. Duranti. 1982. "On the Object Relation in Bantu," in P. J. Hopper and S. A. Thompson(eds.) *Syntax and Semantics* 15, 217-239, New York: Academic Press.

Kaji, Shigeki. 1997. "The Applicative in Tembo(Bantu, J57): A Preliminary Synthesis," in Matsumura K. and T. Hayasi(eds.) *The Dative and Related Phenomena*, 145-164, Tokyo: Hituzi Syobo.

Kisseberth, Charles W. and Mohammad I. Abasheikh. 1977. "The Object Relationship in Chi-Mwi:ni, A Bantu Language," in P.Cole and J.M Sadock (eds.) *Syntax and Semantics* 8, 179-218, New York: Academic Press.

小森淳子. 2003.『ケレウェ語の記述研究 —文法・接触による変容・言語文化— 』, 未刊の博士論文, 京都大学.

Mchombo, Sam A. (ed.) 1993. *Theoretical Aspects of Bantu Grammar*, Stanford, California: CSLI Publications.

Ngonyani, Deogratias Stan. 1996. *The Morphosyntax of Applicatives,* Ph.D dissertation, UCLA, UMI.

中島 久. 2000.『スワヒリ語文法』, 東京: 大学書林.

Port, Robert. F. 1981. "The Applied Suffix in Swahili," *Studies in African Linguistics* 12:1, 71-82.

米田信子. 1997.「ヘレロ語適用形の機能」,『アジア・アフリカ言語文化研究』53, 123-136, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

_____ 2000.『マテンゴ語の記述研究(バンツー系, タンザニア) —動詞構造を中心に— 』, 未刊の博士論文, 東京外国語大学.

湯川恭敏. 2002.「トーロ語の動詞」, 加賀谷良平(編)『北部中央バントゥ諸語の記述・比較研究』, 平成 11-13 年度科学研究費補助金(課題番号 11691913)研究成果報告書, 13-41.